

定時制高校における文語文法の導入指導

——よりよい指導計画をめざして——

森 喬 規

一、はじめに

昨年四月に現場に出てから一年あまりの実践の中で、もっとも抵抗を感じたのは、文語文法の導入指導であった。なかでも、普通課程の定時制高校において、それがどう行なわれるべきかということが、わたしにとっては大きな問題になってきた。導入の際に、どこから手をつけていくか、どういう見通しをたてていくべきか、その見当がまったくつかない状態であった。すなわち、きわめて初歩的な段階で、文法指導が問題となっていた。

そこで、昨年度の実践を反省し、新しく指導計画をたててみることによって、一つの手がかりをつかみたいと願った。各単元で個別に考えていたものを、一貫した、系統だったものとして計画してみようとした。

したがって、この発表は、新しい指導の報告ではなく、いかに失敗したか、そしてそれをどう改めていくべきであるかについての、わたくし自身の反省である。ご指導とご批評をお願いしたい。

実践の反省のまえに、定時制としてどのような制約があるかを見

ておきたい。

国語のカリキュラムに関しては、まずじゅうぶん見てさしつかえない。国語(甲)が十単位、国語(乙)が六単位、漢文が四単位組まれており、恵まれた状態であるといえる。

この中で古文の占めている割合が、予想以上に大きい。国語(甲)に使用した教科書(教育図書研究会編、「総合新高等国語」)では、三十二単元のうち七単元が古典を扱ったものである。ページ数では、指導要領に示されている二十%から三十%という標準を越えて、四十%近い部分を占めている。このうえに国語(乙)を加えると、半分近くを古文で占めていることになる。これが、生徒にとって、大きな負担となっている。生徒は、古文にほとんど必要性を感じていないからである。

さらに、授業時間については、単位時間をじゅうぶん減じて四十分にししていることなどのため、実質的には必要時間数の約七十五%くらいしか実施されていない現状である。そのうえ、生徒の欠席、遅刻も多いために、時間的な制約は大きな障害となっている。ことに、欠席の多かったことは、文法指導の上で困った点の一つであった。

二、はじめでの指導とその反省

文語文法をはじめて学習する第一学年においては、国語(甲)四単位と国語(乙)二単位とが配分されていた。このうち、文語文法の指導は、国語(甲)で行なうことにした。国語(乙)で文法だけを切り離して指導することによって、文法と古文とを分けて考えるようになることを恐れたわけである。文法はなるべく表面に出さないで、文の中で、文とともに扱うべきだという考えが、そのもとになった。

第一学年の国語(甲)の単元は、使用教科書では、次のようになっていた。

- (一) 新しい国語学習
 - 二八時間
- (二) 近代の短歌と俳句
 - 一四時間
- (三) 長編小説
 - 一六時間
- (四) 古典に親しむ
 - 二四時間
- (四) 国語の理解を深める
 - 四時間
- (四) 漢文入門
 - (省略)
- (四) 古典を読む
 - 三二時間
- (四) 文語のきまり
 - 一二時間

この中で、文語文法に関係が深いのは、(四)、(三)、(四)の三単元である。導入は、とくに(四)の「古典に親しむ」の単元で行なわれるべきであると考へ、それまでは文語文法には触れないでおこうとした。いたずらに混乱させては、かえって悪い影響しか与えないと考へたからである。

一方、教科書の内容にしたがって扱っていくこと、文法事項は、

抵抗のあるものから取りあげていくことという二つを、扱いのうゑで考へていた。

各単元での指導の概略を示すと次のようになる。

単元(四)「古典に親しむ」の扱い

小単元と配当時間は次のようになった。

(1) 古典の学習とその意義

(2) 荒城の月

(3) 折りたく柴の記

(4) 七言絶句の詩

この単元の目標として、次の三つを中心に考へた。

1 古典の意義と価値について正しい理解を得て、古典に興味を持つようになる。

2 文語文法、ことに助詞、助動詞の働きがわかり、一応利用できるようにする。

3 古文の語法になれ、読解の方法について理解する。

この目標をもとに、最初の古文である「荒城の月」と「折りたく柴の記」とを扱ったが、前者が古文らしいものであり、古文に近づいたための扱いになったのに対して、後者は本格的な古文としての扱いになつた。

扱った項目を列挙すると、次のようになる。

「荒城の月」

(1) イ 口語と文語のちがいで調べ、まとめてみる。

ロ そこから、助詞の省略と格助詞「の」「が」の用法についてまとめる。

ハ、助動詞「き」「ず」「む」について知る。

ニ、口語訳をしてみる。

ホ、対句的表現について理解し、韻律のよさを考えていく。

「折りたく柴の記」

(1)イ、読みなれること。(かなづかいは、国語(乙)の「枕草子」で指導済み)

ロ、助動詞「き」「ず」「む」について、復習し、整理する。

ハ、助動詞「けり」「べし」について考え、「けり」は、活用形を帰納的に導き出す。

ニ、助詞「や」から、係り結びについて考える。

ホ、敬語について、尊敬・謙讓・丁寧の働きがあることを説明する。

(2)イ、文語の特徴、助詞の省略、助動詞のはたらき、助詞の役割り敬語についてまとめる。

ロ、助動詞「らる」「たり」「しむ」「ぬ」について理解する。

ハ、サ変の動詞(「題す」「しければ」)

ニ、代名詞についてまとめる。

(3)イ、口語と意味のちがう語(「やがて」など)について説明する。

ロ、助動詞「す」「たし」「べし」「り」について調べる。

ハ、助詞「こそ」の用法について考える。

(4)イ、敬語と既習の助詞のまとめをする。

ロ、助動詞「なり」について調べる。

ハ、ことばの変化について考える。

(「にあり」↓「なり」など)

(5)イ、助動詞「む」について調べる。

ロ、係り結びのまとめをする。

ハ、代名詞を、口語と比較して理解する。

(6)イ、内容の整理とあわせて、文語に特有な語句の説明をする。

ロ、文章の性格について考える。

(7)イ、読みにより、理解の程度を見る。

ロ、文語文において、口語とちがう用法と意味を持つ語についてまとめる。

(右の(1)……(7)は二単位時間をつないだ八十分の授業の一回分を示す。)

おおよそ以上のよりな指導になったが、反省すべき点として考えたのは、次の諸点である。

1、文語文法はこの単元から始まると考えたこと——そのために生徒に改まった感じを与え、導入がいっそうむずかしくなった。いっぽう準備不足の原因ともなった。とにかく、ここまでの段階でしておくべきことがたくさんあった。

2、余体の見通しがたつていなかったこと——計画性のない場あたりのな指導であった。重点の置き方を誤まり、順序が前後し、脱着した文法事項もあった。

3、生徒の持つ文法知識についての配慮が欠けていたこと——いきなり助詞、助動詞の説明から入ったのもこのためである。口語文法ま文語の用言を、わかりきったこととして処理したのも、失敗の一因であった。理解の手がかりとして、そういった

ものを利用することができていない。

4、学習上の抵抗がどこにあるかを知らなかったこと——どこがむずかしく、どこが理解しやすいかがわからなかった。また、理解のテンポや、理解と使用能力との関係についても、よみ誤まった点が多い。

5、出てくる文法事項をその場で全部説明しようとしたこと——指導の混乱の原因となった。これも、全体の見通しがたっていなかったことによる。接続を学んでから活用に進んだりする、順序のいれちがいが多かった。生徒に難解な感じを与え、興味をそぐことにもなった。

6、興味づけに失敗したこと——文法は万能であり、しかも理解することが大変なものであるという印象を持った者が、かなりいたようである。

7、教材が適当でなかったこと——助動詞の種類が多いことが、導入の場合の抵抗となった。また教訓的で難解であること（「折りたく柴の記」）も、興味をそぐ原因となった。導入教材としては、説話文学が適当と思われる。

単元(4)「古典を読む」の扱い

この単元には、六つの小単元があったが、扱ったのは、「平家物語」と「徒然草」とである。

(1) 少将部がへり

九時間

(2) 月見(以上「平家物語」)

一時間

(3) 平家雑感

(省略)

(4) つれづれなるまゝに(「徒然草」)

一六時間

(5) 師の説(「玉勝間」)

(省略)

(6) 漢文

(省略)

目標として、次の三つを考えた。

1、各作品により、リズム、文体などその表現様式のちがいを知らる。

2、文法力をよりの確なものにしていくために、助詞、助動詞、文節関係、代名詞、副詞を扱う。また、前単元の反省から、用言の活用についても整理する。

3、古文を親しいものとして読みとっていけるようになる。

まず、「平家物語」では、主語・述語の関係を中心に、音便の説明、副詞のはたらきと意味、助動詞のはたらき、助動詞「る」「む」「けむ」「らむ」「まし」「ごとし」などについて取りあげていった。

「徒然草」では、形容詞・形容動詞の活用・動詞の活用・係り結び、敬語表現についてまとめ、品詞分けを試みることによって、各品詞に触れてみた。修飾語について説明し、ことばの呼応関係についてまとめる。助動詞では「めり」「ぬ」「らる」「り」「ず」「じ」「まじ」「ぬべし」「つべし」について説明していった。反省として

1、単調な指導になったこと——文法事項がきちんと整理されなため混乱したが、古文は結局こんなものだという気持ちで、新鮮さが欠けてきたのである。

2、指導があともどりしていたこと——一貫した見通しがなかったために、文語から口語へ、係り結びから用言の活用へと、いう逆の方向に進んでいた。

3、文法が表面に出すぎて、固いものになってしまったこと——
 願詞に達しないために、文法についての説明が多くなり、
 また、説明もくだいものになった。第一学年であれもこれも
 扱おうとしたことが原因である。

単元(ハ)「文語のきまり」の扱い

この単元でこれまでの文語文法の指導のしめくりをつけたいと
 考え、次のような目標をたてた。

1、口語文法と文語文法の役割りのちがいが、内容上のちがいを明
 確にする。

2、動詞・形容詞・形容動詞について整理する。

3、助動詞・助詞のはたらきを整理する。(接続、助動詞の活用
 については、あとにゆずることにした。)

以上の目標も、年度末の時間不足から、全部を終えることはでき
 なかった。口語文法と文語文法の比較は、代名詞を中心としたも
 のとなり、動詞の活用にほとんどすべての時間を費したため、形容
 詞、形容動詞の活用の整理が残ってしまった。助詞のはたらきは一
 応まとめたが、助動詞には言及できずに終わった。要するに、

1、助動詞・助詞がうまくまとめへ結びつかなかったこと——こ
 れまで断片的に扱ってきたものをまとめて定着させることに
 失敗したのである。

2、動詞においては、二段活用ものに抵抗を強く感じたこと。

3、全部をまとめ終わらなかったために、きちんと整理された印
 象を残さなかったこと——このため「基礎ができていない。」
 という反省が多く出された。各品詞にわたって一応体系的な

総まとめをし、全体的な視野を持たせることが、この段階では必要
 であったと思う。助詞、助動詞に多くの時間をさき、簡単に各品詞
 にも触れることである。

以上のような反省をもとに、今年度の指導計画を練ってみた。

三、今年度の指導計画

指導計画をたてるまえに、新しく入学してくる生徒がどの程度の
 文法知識を持っているかを、今年度入学の生徒(男子五名、女子十
 三名)を対象に、調査してみた。

文法事項	文の成分間の関係			助動詞識別	活用形の理解	活用			助詞のはたらき
	用言の品詞分け	助動詞識別	活用形の理解			上	四	カ	
できている者	9	12	7	14	14	3	4	3	3
不完全な者	5	2	0	0	0	11	9	0	0
できていない者	4	4	11	4	4	4	5	15	15

(昭和三五四年四月一六日調査)

調査の結果として次のようなことがわかる。

1、文法についてまったくわかっていないものが、かなりいること。(三名)

2、活用について理解できていないものがあるということ。

3、動詞のばあい、語の区切りをはっきりさせて活用させる必要のあること。たとえば上一段、カ変などの活用において

な、ま、る、る、れ、よ

み、み、る、る、れ、よ

のような、単語としての切れ目がはっきりわかっていない者が半分ほど見られる。

4、助詞についてはほとんど知らない状態であること。

5、文の成分間の関係が予想ほどにはできていないこと。この調査では、主語述語を指摘させて調べたが、修飾語などでもっと悪い結果が予想されるからである。

この結果は、中学校卒業後ただちに入学したものが半数以下ということから、うなずかれることである。

指導計画

まず基本的な方針として、次のようなことを考えた。

(1) 国語(甲)において、文に即した文語文法の導入指導を考へる。これは、最初のものを踏襲するわけである。

(2) 口語文法を、文語文法の足がかりとして、十分利用する。そのために、最初の古文の教材に至るまでの単元を利用し、計画の中へ織りこむ。そこで口語文法をまとめ、文語文法へというつながりを重視するのである。

(3) 古文の教材に即して、実例を通じての指導を行ない、最後

に総括的にまとめいく。

(4) まとめは、用言については完全なものを目ざし(時間的には短かく)、助詞、助動詞は細かくはやらない。

(5) 計画では、どういふ項目を、どういふ順序で指導するか、という点を重視していく。

この方針をもとに、前年度の指導を参考にしながら、各単元ごとに計画を立てていってみた。第一学年では、詞を主とし、二年以上で辞を本格的に扱うというねらいの計画である。

単元(一)「新しい国語学習」

この単元では、口語文法の整理を行なう。そのために、文の構造から用言の活用へ、という手順を考えてみた。

小単元としては次の六つがある。

(1) 表現と理解

(2) 発音

(3) ラジオと聞きじょうず

(4) 調子第一

(5) 大意や要旨のとらえ方

(6) 筋の通った文章の書き方

この教材を利用して、次のように進めていきたい。

1、接統詞と代名詞(連体詞)を中心にした説解指導(「表現と理解」においては、「さて―したがって―ゆえに―ただ―それよりも―すなわち―また―」などのように、順接・逆接の例が多い。)

2、句読点の指導から、文と文節をたしかめる。(「発音」)これは、早い時期に、作文指導とも関連させて扱う。

3、主語・述語・修飾語・独立語のたしかめ。(「ラジオと聞き
じょうず」には、「何々は」の形が多い。)

4、修飾語から、各品詞のたしかめを、副詞に重点を置いて行な
う。

5、主語に関連して、助詞のはたらきをまとめる。

6、述語から用言の活用へ進む。

○活用ということ、活用形。

○活用の種類・何段活用という名称の由来の説明。

○四段活用・五段活用などの用語の違いを整理統一しておく。

○形容詞・形容動詞の活用をはっきりさせる。

7、文・段落・文章について確かめる。(「大意や要旨のとらえ
方」に説明がある。)

単元(「近代の短歌と俳句」)

この単元を、文語文法への第一歩として、重く考えたい。現代の
作品であることや、短詩型に独自の表現法がある点にはじゅうぶん
注意しなければならないが、かなづかいその他、ここをていねいに
指導することによって、最初の古文に接する場合、親しい気持ちで接
することができると思われる。特に短歌では役立つ面が多い。小単
元としては、

(1) 春のものと(短歌)

(2) 柿くへば(俳句)

の二つだけであり、前者に重点を置いた指導となる。

1、文語文と口語文とのちがいを簡単に調べてみる。

○かなづかい(実例を多く出してたしかなものにしておく。現

代かなづかいについても徹底させておく。)

○主語のあらわれ方(助詞「の」の用法、助詞の省略など)

○文の結び方のちがい(品詞について考えてみる。特に口語に
ない助詞・助動詞に注意する。)

○用言、特に形容詞や二段活用の動詞について考える。(「聞
ゆる」「寂し」「静けし」など)

2、文語文になれるため、できるだけ暗誦させる。短かいもので
あるために、引用にも便利である。

3、一部については、口語への結びつきも考える。(「とまらむ
として」「思はれぬまで」など)

4、文の構造について考える。何句切れかということから、修
飾関係に及び、主語・述語・修飾語間の倒置法を説明する。

単元(「古典に親しむ」)

本格的に古文を扱う単元として、動詞の活用を中心に考えていき
たい。動詞の識別から、活用形・活用の種類に至るまでには、多く
の抵抗がある。また動詞の活用が、各文法事項の基礎となるために、
最初に扱っておく必要を感じたからである。

教材としては、「荒城の月」「折りたく柴の記」が適当なものでは
ないので、「今昔物語」のうち適当なものと入れかえて扱う。婦
納的に活用形を導き出す場合には、できるだけ少ない言葉で作られ
た物語のほうが便利であるし、話として興味も強いものがあるから
である。

冒頭にあった「古典の学習とその意義」は、「今昔物語」の指導
のあとで扱いたい。

1、「かなづかい」に注意して読みなれる。読みなれることによ

って、古文に対して持っている抵抗の多くは除かれる。したがって、じゅうぶんに読み進めていく。

2、口語と文語とをくわしく比較してみる。

○助詞の省略と、係り結びなどの場合の助詞の位置

○二段活用・変格活用の動詞と、形容詞の終止形・連体形

○新しい助動詞・助詞

3、動詞の活用・活用形・活用の種類について理解する。

○口語の動詞の復習をする。

○具体例によって、仮定形・已然形の説明をする。

○五十音図をまとめてから、活用させてみる。

○上二段・下二段活用の動詞に重点を置いて活用させ、四段・

上二段・下二段活用の動詞は簡単に終える。

○変格活用の動詞は、口語との比較に重点を置く。

○出てくる動詞を活用させて、種類わけを試みる。

4、敬語について説明しておく。

5、助動詞については、口語にいいえられるものを整理しておく。

単元(四)「国語の理解を深める」

この単元でこれまで対照的に比較しながら理解してきた口語がひと続きのものであるという意識を強く打ち出したい。単元(二)で考えおいた、文語から口語への移り変わりも、こゝでまとめたい。

文語文法の理解のために強調して扱った文語・口語の相違点を、ここでは、類似性からとらえて、日本語としてのより大きな視野から考えていくようにする。

ここでは、次の二つの小単元があるが、対象となるのは、(一)であ

る。

(一) 言語の本質と国語の理解

(二) 漢字と漢語

単元(七)「古典を読む」

ここで、詞について一通り触れておく。すなわち、次のまともに至る手がかりを作っておくためである。単元(四)では、動詞以外はほとんど触れていないために、この単元で、そういった基礎的な文法事項と品詞とに注意を向けたい。

さらに、この単元では、古文解釈の一般的手順についても、ひととおり理解しておきたい。すなわち、文節関係を中心に、解釈の方法を考えていく。その中で、さきの文法事項と品詞とを扱った古文解釈に、一応しめくりをつけてみたい。

1、動詞のまとめを復習しながら、音便について理解する。平家物語に見られる音便は、口語の音便に近く、理解がしやすいと思われる。語の転成(連用形の名詞化など)は、混乱するので、ここでは扱わない。

2、代名詞についてまとめる。そこから文脈をたどっての解釈も試みてみる。

3、さらに、文節関係を、主語の省略などを中心にまとめていく。こゝで、敬語についても再び触れる。(以上「平家物語」)

4、形容詞・形容動詞の活用をまとめ、品詞としての識別法を知

る。

5、副詞について、呼応関係に注意しながらまとめる。陳述の副詞と、程度・情態の副詞とのちがいに注意する。

6、さらに、係り結びについて、陳述の副詞とくらべながらまとめ

ていく。形と意味(はたらき)の両面から、ていねいに扱って
いきたい。(以上「徒然草」)

7、助動詞については、主要なものの意味を説明し、活用につ
ては、終止形が思い出せるよう指導しておく。すなわち、一語
の意味をたしかなものにしていく。

單元(4)「文語のきまり」

これまで古文の中で扱ってきた文法事項を整理し、まとめる單元
である。ばらばらに持っている知識を、統一のあるものとして、体
系だつたものすることによって、共通する規則性や関連を考えて
いくことも大切であると考えられる。これによって、記憶しやす
いものとし、使いやすいものとしていきたい。

ただ、理想をいえば、やはり文法だけを取り出して扱うことは避
けたい。ゞ文に即してゞという点からいえば、徹底しない、中途半
端なものといえる。しかし、授業のはじめに遅れてくる者、欠席者
の多い現状ではやむを得ないし、むしろこういう方法のほうが、大
きな効果を期待できそうである。

1、各品詞について簡単にまとめる。全体のバランスを考え、分
けられた理由をつかむ。

2、動詞については、今までの作業の上になつて、文語・口語の
活用の種類のちがいを整理してみる。

3、形容詞・形容動詞についても、活用と用法についてまとめる。
形容詞・形容動詞の識別については、名詞などとの関係からは
つきりしたものとしておく。

4、助詞・助動詞については、意味と一語としてのまとまり(活
用)を簡単に整理し、接続については、深く調べることはしな
い。とにかく、あとで利用する場合、抵抗を感じないようにし
ておくことである。

四、むすび

これまでの作業を通じて残された問題点を考え、結びとしたい。

(1) まず、計画がきわめて大ざっぱになつてしまつた点である。
こまかに心をくばつたものへと心がけていきたい。

(2) もっと能率的な指導計画は立てられないだろうか。このこ
とは、定時制が時間的に乏しい点からも考えていかねばなら
ない問題である。そのために、もう一歩文の中へ踏みこんだ
解釈指導に進めていく必要がある。そこで、文法用語をでき
るだけひかえた指導を考へたい。口語にいいかえる方法な
ど、利用の範囲は広いと思つている。

(3) 文法指導は、いかにうまく反復し、積み重ねていくかにか
かっている。定時制では、欠席したもののための説明とし
ても考えていかねばならない問題である。また助詞・助動詞
などのように、漸層的な深め方をする場合の最初の説明にお
いて、中途半端な受け取り方をさせないための方法としても、
重要である。口語へのいいかえによって助動詞の意味を考
え、終止形を思い出させることで活用にたえて説明しよう
としたが、まだまだ工夫が必要である。

(4) 生徒の感ずる抵抗はまだかなり大きい。文語文法への興味
づけ、さらには古文への興味づけを考えていかねばならな
い。進学のためという必要感も、定時制では、少数の者の頭
にしかない。人間形成につながる本来の意味の目的を身近
かに感じさせ、そこから必要感を喚起する指導でなければな
らない。

(5) 最後に、この計画を最後の学年にまでのばしていく必要が
ある。高校を一貫した文法指導の計画を旨ざしていきたい。

(坂出高校教諭)